

コロナ、ミケランジェロ、ポントルモ —時代と向き合う芸術家たち

根占 献一

(一)

ここ20年余りの間、即ち前世紀の最後の10年ほどと今世紀の最初の10年ほどの間に、ヴィットリア・コロナ (Vittoria Colonna 1492 - 1547) に対する歴史的関心、すなわちフェニズム的視点を含む出版文化的関心¹、およびプロテスタンティズム的視点を含む宗教的関心²が高まるなか、この女流詩人との交流で知られるミケランジェロ・ブオナッローティ (Michelangelo Buonarroti 1475-1564)、そしてこの芸術家から最も強い影響を受けた一人であるヤコポ・ダ・ポントルモ (Jacopo da Pontormo 1494-1556) の時代的境位が問題となり、研究を賑わしている。本論の目的は、かなり数に上る文献のなかからこれら三人の芸術家たちの研究を中心にその一端を紹介し、現時点での私の問題意識を明示することにある。

1989年、コロナとレジナルド・ポル (Reginald Pole 1500-1558) に関わる未刊行史料 (『ヴィットリア・コロナとレジナルド・ポルに関する新史料』) が公刊されて、より開かれた宗教上の議論を喚起することになる。これには、セルジョ・パガーノによる「ヴィットリア・コロナと異端審問」(21-62) とコンチェッタ・ラニエーリによる「史料テキストの歴史と分析」(63-88) と題された論述的解説が含まれている³。英国王

¹ 一書を挙げれば、Diana Robin, *Publishing Women. Salons, the Presses, and the Counter-Reformation in the Sixteenth-Century Italy*, Chicago and London 2007. コロナがGiovanna d'Aragona, Laudomia Forteguerriとともに論述される。ダイアナ・ロビンの最初の本格的な研究書は、私が知る限りFilelfo in Milan. *Writings 1451-1477*, Princeton NJ 1991. ロビンの新刊登場は、ここ20年ほどの間に欧米で盛んになった女性史研究の影響を受けてのことでもあろう。無論、彼女の次の仕事も重要。Filelfo, *Odes*, ed. by D. Robin, Cambridge, Mass. 2009.

² Emidio Campi, «Non vi si pensa quanto sangue costa». Michelangelo, Vittoria Colonna e Bernardino Ochino, in *Dall'Accademia neoplatonica fiorentina alla Riforma*. Celebrazioni del V centenario della morte di Lorenzo il Magnifico. Convegno di studio, Firenze 1994, 67-135. 以下に所収。Id., *Michelangelo e Vittoria Colonna. Un dialogo artistico-teologico ispirato da Bernardino Ochino e altri saggi di storia di Riforma*, Torino 1994. これには初出論文と違いAppendice: Documentiが含まれている。Bernardino Ochinoの諸説教、Vittoria ColonnaのPianto della Marchesa di Pescara sopra la Passione di Christo, それに彼女とミケランジェロ間の書簡である。これら一次文献はいずれもここが初出ではないが、一緒に集められ重宝である。Maria Forcellino, *Michelangelo, Vittoria Colonna e gli "spirituali"*. Religiosità e vita artistica a Roma negli anni Quaranta, Roma, 2009, 68-69.

³ Sergio M. Pagano e Concetta Ranieri, *Nuovi documenti su Vittoria Colonna e Reginald Pole*, Città del Vaticano 1989. これはガリレオ・ガリレイ裁判に次ぐ、異端審問に関わる古史料集成である。

ヘンリー8世に敵対（1532年イタリア亡命）する従兄弟、枢機卿ボルは、カトリック厳格主義者からは異端の徒に映じながらも、カトリック改革派の指導者にしてローマ教皇に選出される可能性さえあった。1549年12月のコンクラーヴェでは開票すると、教皇座に就くには一票足らなかった⁴。最終的な勝者はジョヴァンニ・マリア・チョッキ・デル・モンテ（Giovanni Maria Ciocchi del Monte）で教皇ユリウス3世（1487-1555. 在位1550-1555）となった⁵。すでにトレント公会議は始まっていた。ユリウス3世死去後もなお、ボルを教皇に推す声は消えなかった。この後は、公会議史家として著名なイエーデンが真のカトリック改革の最初の教皇と呼んだ、マルチェッロ・チェルヴィーニ（Marcello Cervini 1501-1555）ことマルケッルス2世⁶がわずか3週間在位しただけだった。更に彼に続いたのは、長年の角逐関係にあったジャン・ピエトロ・カラファ（Gian Pietro Carafa）ことパウルス4世（1476-1559. 在位1555 - 1559）であった。こうして改革派が教皇となる道は閉ざされた。

1997年にはウィーンの芸術史美術館（Kunsthistorisches Museum）でコロナの展覧会が開催され、そのカタログ（*Vittoria Colonna, Ausstellungskatalog des Kunsthistorischen Museums, Wien*）も充実した大著となって世に出た⁷。また、さらにこの8年後の2005年、フィレンツェのカーザ・ブオナッローティでの展示が同じく書として出た⁸。これらの目録にはいずれもボルの肖像画（エルミタージュ美術館、サンクト・ペテルスブルク）が収録されている⁹。コロナと関わり深い、「霊的人たち」（スピリトゥアリ spirituali）¹⁰の間ではミケランジェロの作品が求められていた。その作品

⁴ *Ibid.*, 29 n12.

⁵ この間の詳細な経緯は、Thomas F. Mayer, *The War of the Two Saints: The Conclave of Julius III and Cardinal Pole, in Cardinal Pole in European Context. A Via Media in the Reformation*, Aldershot 2000, IV(1-21).

⁶ William V. Hudon, *Marcello Cervini and Ecclesiastical Government in Tridentine Italy*, DeKalb 1992, 61-Hubert Jedinの言。この研究書は類書が少なく貴重であろう。

⁷ *Vittoria Colonna. Dichterin und Muse Michelangelos*, Silvia Ferino-Pagden mit Beiträgen von Agostino Attanasio, Hans H. Aurenhammer, Emidio Campi, Stefano Corsi, Romeo De Maio, Sylvie Deswarte-Rosa, Gigliola Fragnito, Michael Hirst, Dirk Hoeges, Pierluigi Leone de Castris, Luisa Martorelli, Gudula Mayer, Leatrice Mendelsohn, Giorgio Patrizi, Stefania Pitscheider, Adriano Prosperi, Tobia R. Toscano und Carlo Vecce, Skira Editore 1997.

⁸ *Vittoria Colonna e Michelangelo*, a cura di Pina Ragionieri, Firenze 2005.

⁹ *Vittoria Colonna. Dichterin und Muse Michelangelo*, 251-254. *Vittoria Colonna e Michelangelo*, 114-117. それぞれ Sebastiano del Piombo(?), Perino del Vagaと違った画家に帰属されている。近年のボル研究の一大成果、Thomas F. Mayer, *Reginald Pole. Prince and Prophet*, Cambridge 2000, 386-438 にはボルの肖像画をめぐる全般的な議論が行われている。ここで引用されている研究者の一人は本文に出る Elisabeth Cropperである。

¹⁰ Massimo Firpo(本論後述)の数多い研究は「霊的人たち」(スピリトゥアリ)に関わる。次の書はそのような一冊であろう。Firpo, *Tra "alumbados" e "spirituali"*. *Studi su Juan Valdés e il valdesianesimo nella crisi religiosa dell'Italia del '500*, Firenze 1991. このスピリトゥアリの用法に慎重な、あるいは皮肉な意見もある。この語は聖パウロに遡及して、carnale, temporaleと対比的言葉であろうが、時代の「霊的人たち」がこれらに無縁であったかどうかは議論が分かれる。また時にそれはintransigenteとも対比されよう。これまた線引きが困難な場合もありえる。だが、Evangelismoとともにこの概念は時代解釈に関わり、議論上不可欠となっている。Elisabeth G. Gleason, *Gasparo Contarini. Venice, Rome, and Reform*, Berkeley and Los Angeles 1993, 190-196. Hudon, *op.cit.*, ch.1 なども参考になるところ大である。

とは、ミケランジェロによるコロンナのための《ピエタ》（*Pietà*, Boston, Isabella Stewart Gardner Museum）と《十字架上のキリスト（磔刑）》（*Christ on the Cross*（*Crucifixion*）, London, British Museum）である¹¹。そして、これらよりかなり早い段階の《埋葬》（*Entombment*, London, National Gallery）が、若きミケランジェロに決定的に帰属するとの視点から行われた、それらとは別個の、ロンドンでの展示カタログ¹²が注目されよう。以上の諸作品をめぐる神学上の解釈は興味深く、書が幾つか著されている¹³。

また、近年一大修復が行われたミケランジェロのシステーナ礼拝堂天井画も祭壇画も、ともに研究者の解釈に大いなる刺激を与えるとともに、美術愛好者の関心を惹きつけてきた。ここでは祭壇画のほうの《最後の審判》（*Giudizio Universale*）¹⁴に注目したい。メディチ家出身のローマ教皇クレメンス7世（1478-1534. 在位1523-1534）と交わした、この主題を描く契約は、ミケランジェロがローマ到着後すぐに教皇の死が起こったとはいえ、次の教皇パウルス3世（1468-1549. 在位1534-1549）に受け継がれた。1535年9月1日、このフィレンツェ市民出身の芸術家は、この新教皇により「教皇庁付き画家・彫刻家・建築家」の称号を付与される。制作開始は同年か翌年かであろうが、完成を祝するのは1541年10月31日万聖節前夜である。

そのフレスコ画大作から影響を受けて、フィレンツェのサン・ロレンツォ聖堂内陣席祭壇画に取り組んだ画家はポントルモであった。これに関わるマッシモ・フィルポの歴史研究¹⁵が注目されよう。この祭壇画は18世紀に消失するものの、多くの素描が残されていて、正統教義からは懐疑の念を抱いて見られ続けた図像を推測することができる。

¹¹ 十字架上の死をめぐる歴史的考察として Reiner Haussherr, *Michelangelos Krucifixus für Vittoria Colonna. Bemerkungen zu Ikonographie und theologischer Deutung*, Opladen 1971. ライナー・ハウスヘルは始めに、ともにミケランジェロ伝を書いたAscanio Condivi, Giorgio Vasariのミケランジェロとの関連叙述を問題にし、素描《サマリヤ人の女》（本論後述）は後者の伝記のみに書かれていると指摘する。これらの著名な、ミケランジェロと同時代人の伝記は邦訳があり、特に前者は註において、コロンナとミケランジェロの繋がりを考察する上で極めて重要なフランシスコ・デ・オランダ（本論後述）による関連箇所を詳細に紹介する熟の入れようで、訳者の思いが伝わる。アスカニオ・コンディヴィ『ミケランジェロ伝一付＝ミケランジェロの詩と手紙』高田博厚訳、岩崎美術社、1978年。

¹² Micheal Hirst and Jill Dunkerton, *Making and Meaning. The Young Michelangelo*, London 1994. これはまた1496年から1501年にかけてのローマ滞在中の創作活動を明らかにする。イタリア語訳版（Modena 1997）もあるようだが、未見。

¹³ その一冊はAlexander Nagel, *Michelangelo and the Reform of Art*, Cambridge, Mass. 2000. 《埋葬》は元来ローマのサンタゴスティーノ聖堂故クロトーネ司教礼拝堂にあった。この聖堂と修道院はローマのルネサンス文化上、注目に値する。本論で少しく述べる予定である。

¹⁴ 次の詳細な研究は、この図像問題から始まる。Romeo De Maio, *Michelangelo e la Controriforma*, Firenze 1990(1978). 小文では触れないイエズス会士やヒューマニストなど、多様な同時代人と芸術家の関係がこの書では明らかにされる。

¹⁵ Massimo Firpo, *Gli affreschi di Pontormo a San Lorenzo. Eresia, politica e cultura nella Firenze di Cosimo I*, Torino 1997. 祭壇画分析の歴史は*Ibid.*, 31-53. Cfr. De Maio, *op.cit.*, 84..

先輩が制作した《最後の審判》の研究のために、ローマを訪れたと考えられるポントルモ¹⁶はミケランジェロと違い、フィレンツェを去ることはなかった。このため彼にあってはフィレンツェ政治史とのより強い結びつきが問題となろう。この点は後述したい。ポントルモはアーニョロ・ブロンズイーノ (Agnolo Bronzino 1503-1572) やアレッサンドロ・アッローリ (Alessandro Allori 1535 - 1607) に先立つ、メディチ公国の宮廷画家であった。彼らはすべてミケランジェロの「物凄さ」(terribilità) からの影響を甚大に受けるとともに、「麗しき手法」(bella maniera) を見事に駆使した¹⁷。

(二)

宗教史的視点からの16世紀イタリア女性研究は決して少なくはない。カテリーナ・チーボ (Caterina Cibo 1501-1557) もその一人であろう¹⁸。チーボの母はロレンツォ・イル・マニフィコ女子マッダレーナであった。メディチ家の血を引く者のなかからも「異端者」が出たことになる。彼女に較べ、割に高い関心が持たれてきた女性は、コロナナとは親族になるジュリア・ゴンザーガ (Giulia Gonzaga 1513-1566) である¹⁹。その美貌と貞節はアリオスト (Lodovico Ariosto 1477-1533) やベルナルド・タッソ (Bernardo Tasso 1493-1569) など、詩人や文学者たちにより讃えられてきた。物語的話題も名高い。また、イッポーリト・デ・メディチ (Ippolito de' Medici 後述) の彼女に対する思いはよく知られている。ピエトロ・カルネセッキ (Pietro Carnesecchi 1508-1567) への長年の支援的厚情も、劣らず広く知られている。カルネセッキは異端者として処刑され、その審問、裁判記録によれば、34もの誤りが指摘された。そこには煉獄の存在や化体説への、告解やそのほかのサクラメントなどのへの懐疑と教会の権威否認などが含まれる²⁰。すべては「信仰のみ」(Sola Fide) の思想に誤謬のもとがある、と。ドンナ・ジュリアがナボ

¹⁶ Philippe Costamagna, *Pontorno*, Milano 1994, 92-93. 祭壇画分析は *Ibid.*, 252-266. *Michelangelo's Last Judgment*, edited by Marcia B. Hall, Cambridge 2004. こちらは《最後の審判》を美術史的、宗教史的など総合的に把握する試み。分けても本論の関連では次の論文が重要であり、註に出る文献も充実している。Thomas F. Mayer, *The Historical and Religious Circumstances of the Last Judgment*, in *ibid.*, 76-94.

¹⁷ ブロンズイーノは詩人でもあり、クルスカ・アカデミーの一員としても名を残している。

¹⁸ 根占献一「カトリック復興期のヒューマニスト、フランチェスコ・セルドナーティ」、『学習院女子大学紀要』第10号(2008)、53-65頁、特に64頁。同「カトリック復興期のヒューマニスト、フランチェスコ・セルドナーティ補遺」、『学習院女子大学紀要』第11号(2009)、65-67、特に66頁。

¹⁹ 最近の研究に、Mario Oliva, *Giulia Gonzaga Colonna tra Rinascimento e Controriforma*, Milano 1985. Camilla Russell, *Giulia Gonzaga and the Religious Controversies of Sixteenth-Century Italy*, Turnhout 2006. ラッセルはこの時代に関わってきたイタリア研究者の分析を行っていて、示唆を受ける点が多い。 *Ibid.*, 44-46. 邦語によるこの方面での研究では、高津美和「16世紀イタリア宗教史の研究動向—デリオ・カンティモリーを転換点として」、『西洋史論叢』第31号(2009)、95-108頁。

²⁰ *I processi inquisitoriali di Pietro Carnesecchi (1557-1567)*. Edizione critica, a cura di Massimo Firpo e Dario Marcatto, Città di Vaticano 2000, II, pt. III, 1371-1374. Russell, *op.cit.*, 205-206.

りでの改革派サークル—後述するファン・デ・バルデスやベルナルディーノ・オキーノがその中心にいた—の重要な場に位置していたことは間違いない。このため後年のジュリアの行動は極めて慎重なように映ずる。

だが、彼女と並んで、あるいはそれ以上に熱い関心が持たれ、研究されてきたのは、既述のヴィットリア・コロナであろう²¹。近年も良書に事欠かない²²。コロナはジュリア・ゴンザーガに較べれば、異端追及の手が延びてくる前に死去した感がある²³。その点ではガスパロ・コンタリーニ (Gasparo Contarini 1483-1542) に類似しているとはいえ、ベルナルディーノ・オキーノ (Bernardino Ochino 1487-c1565) との知己関係は彼女の立場を安穩なものにしなかった。二人の出会いは1534年に遡り、42年夏にオキーノが離伊するまで深い絆が続く間柄となる²⁴。コロナはこののちにカトリック陣営に傾斜するというのが、ミケランジェロ研究の権威ド・トルナイの見解である²⁵。研究者エミディオ・カンピは、先述したコロナのためのミケランジェロ《ピエタ》などにオキーノの神学、宗教思想を関連付ける²⁶。このカプチーノ会士と、34年9月にローマ定住を決めたミケランジェロとを結び付ける文書史料は存在しないだけに注目される解釈であろう。

ところで、コロナ研究の基本となっているのは、彼女の詩と書簡である。詩人ミケランジェロとともに研究されたものも珍しくない²⁷。そのなかで彼女の書簡はその内容

²¹ 眼を通すことができたのは、以下の通り。Maud F. Jerrold, *Vittoria Colonna with Some Account of Her Friends and Her Times*, London 1906. この巻頭図版は興味深いことにレジナルド・ホル枢機卿で、セバスティアノ・デル・ピオンボ作とある。Amy A. Brenardy, *Vittoria Colonna*, Firenze 1927. これは伝記シリーズの一冊となっている。次にドイツ語圏では、Alfred von Reumont, *Vittoria Colonna. Leben, Dichten und Glauben im 16. Jahrhundert*, Freiburg 1881以来、彼女への関心は高い。Johann J. Wyss, *Vittoria Colonna. Leben, Wirken, Werke*, Frauenfeld 1916は学術的著作である。Kurt Pfister, *Vittoria Colonna. Werden und Gestalt der Frübarocken Welt*, München 1950.

²² そのなかで細密に及ぶSuzanne Therault, *Un Cénacle humaniste de la Renaissance autour de Vittoria Colonna châtelaine d'Ischia*, Firenze et Paris 1968 から、最近の研究に基づくのはAbigail Brundin, *Vittoria Colonna and the Spiritual Poetics of the Italian Reformation*, Aldershot 2008まで多様である。

²³ *Nuovi documenti su Vittoria Colonna*, 31.

²⁴ オキーノについては、高津美和「ジュネーヴのベルナルディーノ・オキーノ—カルヴァンとイタリア人亡命者」、『史観』第156冊(2007)、56-73、特に60-63頁。離伊する際フィレンツェからコロナ宛に出した書簡は、*Carteggio di Vittoria Colonna Marchesa di Pescara*, raccolto e pubblicato da Ermanno Ferrero e Giuseppe Müller. Seconda edizione con supplemento raccolto e annotato da Domenico Tordi, Torino 1892, 247-249.

²⁵ Charles de Tolnay, *Michelangelo vol. V The Final Period. Last Judgment, Frescoes of the Pauline Chapel, Last Pietàs*, Princeton NJ 1971, 68.

²⁶ *Michelangelo e Vittoria Colonna*, 65-76.

²⁷ たとえば、Pierre de Bouchaud, *Les poésies de Michel-Ange Buonarroti et de Vittoria Colonna. Essai sur la lyrique italienne du XVI^e siècle*, Paris 1912. これは第一部でミケランジェロ、第二部でヴィットリア・コロナを扱い、後者にはコロナの伝記も含まれる。

とともに交流範囲を示している点で重要である²⁸。そこに新たな書簡 (*Quinternus litterarum Marchionissae Piscariae*) が、異端審問機関でもあるローマ検邪聖省 (Sant' Uffizio) (現在は *Congregazione per la Dottrina della Fede*) の古文書室で発見されて一書となったのが、既出の『ヴィットリア・コロナとレジナルド・ポールに関する新史料』²⁹である。両者間の書簡はこれまで2通知られていたが、新たに6通が増えた。すべてコロナからポールあてである。カルネセッキ裁判において、このカトリック棄教者がコロナとポールの間柄に関して証言していた³⁰ことは夙に有名である。新たな史料の出現は彼らの関係がやはり緊密であったことを示している。カルネセッキはフィレンツェ出身で当時の権力者コジモ・デ・メディチに信を置いていたものの、メディチ公国の政局が影を落とし、彼に悲劇をもたらすことになる。小文では後でこの公国成立期にいささか言及する。

そのほか、この新史料には別人宛のコロナ書簡が含まれる。ポールの秘書官アルヴィーゼ・プリウリ (Alvise Priuli) 宛書簡 (ヴィテルボ発。1543年) もその一通であり、このなかにミケランジェロの名を見いだすことができる。年齢のせい眼鏡またはその類が必要になった絵描きを伝えている³¹。古くからコロナとミケランジェロ間には7通の書簡が知られている。うち2通が後者から前者への手紙である³²。今回の史料は間接的ながら、後述するヴィテルボ派の存在を証すものであり、同一文脈中にマルカントニオ・フラミニオ (Marcantonio Flaminio 1498-1550) の名もある。コロナとミケランジェロがいつ面識を得たかは明瞭でないものの、1536年から38年かと想定される。彼女はローマのサン・シルヴェストロ・イン・カピテ修道院に住んでいたが、ミケランジェ

²⁸ 前註24に既出の *Carteggio di Vittoria Colonna Marchesa di Pescara*, raccolto e pubblicato da Ermanno Ferrero e Giuseppe Müller. これは当時の著名な歴史家 Alfredo Reumont の思い出に捧げられている。フェッレロとミュラーはフォン・ロイモントのコロナ伝を伊訳 (Torino, 1883) している。最近の書簡研究では、コロナとマルグリット・ド・ナヴァルの往復書簡を取り上げた Bally Colettt, *A Long and Troubled pilgrimage. The Correspondence of Marguerite d'Angoulême and Vittoria Colonna 1540-1545*, Princeton NJ, 2000.

²⁹ 註3参照。

³⁰ カルネセッキによれば、il Pole < faceva professione di amarla [Vittoria Colonna] et honorarla come madre, et lei e converso teneva il cardinal per figliolo, et come tale mostrò di tenerlo in effetto, havendo lasciato herede di nove o dieci millia ducati che ella haveva sul monte della Zecca di Vinetia, >. Estratto del processo di Pietro Carnesecchi, a cura di Giacomo Manzoni, in *Miscellanea di storia italiana*, vol. X, Torino 1870, 187-573, 特に268. この箇所は *Carteggio di Vittoria Colonna Marchesa di Pescara* に所収された Appendice, 331-332 に含まれる。 *Nuovi documenti su Vittoria Colonna e Reginald Pole*, 67 n.6.

³¹ *Nuovi documenti su Vittoria Colonna e Reginald Pole*, 149-151, 特に150-151.

³² 『ミケランジェロの手紙』杉浦明平訳、岩波書店1995年、311・312、321・322頁。ミケランジェロは在フィレンツェの甥レオナルド宛書簡でもよくコロナについて言及している。特にコロナ詩集に触れているのは、同上、505・506頁の書簡 (1551年)。邦語文献で本文と関わる論文に、宮田克人「『ロンダニーニのビエタ』について」、『ミケランジェロ研究』平凡社、1978年、207・232、特に215頁以下。邦訳されたミケランジェロ文献では、ド・トルナイ『ミケランジェロ 彫刻家・画家・建築家』田中英道訳、岩波書店1978年、109-134頁。同『ミケランジェロ 芸術と思想』上平貢訳、人文書院1982年、94-139頁。

INTERNET USERS BY LANGUAGE

ロと会ったのは、ドメニコ会系のサン・シルヴェストロ・ア・モンテ・カヴァッロ修道院においてである。ポルトガル出身の画家フランシスコ・デ・オランダの証言によれば、聖パウロ書簡に関する注釈をアンブロジーノ修士から聞いたという。1540年と覚しきコロンナ宛書簡でミケランジェロは「今や私は、神の恩寵は贖われないこと、またそれを無視することは大きな罪だと分かった」([Ho] riconosciuto e visto che la grazia di Iddio non si può comperare e che 'l tenerla a disagio è peccato grandissimo)³³と書く。これは研究者によってしばしば引用される句となっている。

ミケランジェロの長い生涯には、彫刻・絵画・建築の三分野にわたる芸術家としての展開もさることながら、15世紀から16世紀にかけてのヨーロッパにおける宗教上の発展もまた、高度に反映されている。若い時代に遭遇する、厳格なドメニコ会修道会士ジローラモ・サヴォナローラ (Girolamo Savonarola 1452-1498) の説教の響きは、いつまでも記憶に残った。あるいはまた16世紀に入って幾人かのローマ教皇の命を受けて取り組んだ、先の三分野に関わる数々の制作は、ミケランジェロ自身が教皇側の人間であったことを事実として物語っている。サン・ピエトロ大聖堂改築が「宗教改革」の原因として真であるならば、この設計に深く関わった一人として、キリスト教界に分裂をもたらしたミケランジェロの責任も問われることになるかも知れない。確かにカトリック信徒としてミケランジェロの日常生活には形式主義的、伝統主義的側面が色濃くあった。

他方で、ミケランジェロと関係の深いヴィットリア・コロンナや、ジュリア・ゴンザーガたちを取り巻く宗教環境を究めようと、現代の女性研究者も加わって新視点からイタリア近世の宗教問題に言葉鋭く肉薄しようとしているなか、この環境にいたミケランジェロの詩や文面には当然の事ながら当代の改革的な信仰の発露が見られる。それにコロンナたちに関わる同時代の改革派の神学者や聖職者、ヒューマニストや詩人は多い。思いつくままに挙げても、コンタリーニ、ジローラモ・セリパンド (後述)、エルコレ・ゴンザーガ (Ercole Gonzaga)、カルロ・グアルテルッツィ (Carlo Gualteruzzi)、ジョヴァンニ・モローネ (Giovanni Morone)、ジャン・マッテオ・ジベルティ (Gian Matteo Giberti)、ヤコポ・サドレート (Jacopo Sadoleto)、ヴィットリオ・ソランツォ (Vittorio Soranzo)、プリウリ、フラミニオ、ルドヴィーコ・ベッカデッリ (Ludovico Beccadelli)、オキーノ、ピエトロ・マルティーレ・ヴェルミリ (Pietro Martire Vermigli)、ピエル・パオロ・ヴェルジェリオ (Pier Paolo Vergerio) など枚挙に遑がなく、まだまだ落ちている者もあるだろう。彼らに関する重要な個別研究も少なくない。無論、彼ら

³³ 宮内, 前掲論文の231頁註41。前後の文脈を知るには全訳の『ミケランジェロの手紙』321頁。Charles de Tolnay, *op.cit.*, 56.

を一枚岩のように同類の人物たちと捉えることはできない。挙げた最後の三人はカトリック信仰を完全に捨て、イタリアを去った。また近年の調査・研究成果もあり、カルネセッキとともにモローネのようにその異端審問記録が名高いものがある。

そのようななかで、時代の宗教環境を考えるとときに忘れることのできない人物と著作は、1531年頃イタリアに移り住んだスペイン出身のファン・デ・バルデス (Juan de Valdés c1500-1541) と、1543年ヴェネツィアで出た『キリストの恵み』 (*Beneficio di Cristo*. 正式な題は *Trattato utilissimo del beneficio di Giesu Cristo crocifisso verso i Christiani*) であろう。ファン・デ・バルデスはローマ (1534年迄)、ナポリ (1541年の死迄) を拠点にルターの改革思想、即ち信仰義認説を広めたが、エラスムスからの影響も大きかった³⁴。『キリストの恵み』の作者はベネデット・ダ・マントヴァ (Benedetto da Mantova) でこれに加筆したのが、ヒューマニストで詩人のフラミニオと目され、照明説やベネディクト派を始めとする伝統神学の影響が窺えるとともに、十字架に架けられたキリスト信仰中心の救済観を説く。彼らに関わりのある地は、ローマやナポリ、ヴェネツィアに留まらない。分けてもヴィテルボが重要で注目されて久しいが³⁵、近年またこの町に集まったカトリック改革派の動向が研究されている。この町は「霊的人たち」(スピリトゥアリ)の集合地であり、フラミニオを始め、ポル、コロナなどがいて、ヴィテルボ派とか「ヴィテルボ教会」(*Ecclesia Viterbiensis*)とか呼ばれ、独自の存在感を醸し出す³⁶。ミケランジェロがこのグループと関係があったことは、たとえばコロナとカルロ・グアルテルツィ (1500-1577) 間の書簡で明らかである³⁷。

これらの「霊的人たち」(スピリトゥアリ)の関係を明らかにしようとする、最近の研究はマリア・フォルチェッリーニのもので³⁸、その際、特にコロンナ-ミケランジェロ間の書簡に注目する。《ピエタ》や《十字架上のキリスト (磔刑)》、あるいは《サ

³⁴ Charles de Tolany, *ibid.*, 54. ジュリア・ゴンザーガ宛書簡でコロナがバルデスによる聖パオロ書簡註釈を受け取ったことが分かる。 *Carteggio di Vittoria Colonna Marchesa di Pescara*, 238-240, 特に240。この書簡集の註によれば、バルデスがゴンザーガに捧げた聖パオロのローマ人宛書簡註釈を指す。

³⁵ 註21で挙げた Jerrold, *Vittoria Colonna* にはヴィテルボと題した章がある。Mayer, *Reginald Pole*, 103-142 (*The Church of Viterbo?*) で、ナポリからヴィテルボに移動した観のある「霊的人たち」(スピリトゥアリ)が詳細に検討されている。彼らとサヴォナローラ派との関係、コンタリーニとポルなどの人間関係、また思想の相違、『キリストの恵み』の内容と作筆問題など多様である。

³⁶ Mayer, *ibid.*, 103-104. イタリアの著名な研究者 Paolo Simoncelli や Massimo Firpo に比較して、メイヤーはこのグループ内の色分けに慎重な筆法を取る。この問題に関連するシモンチェッリの書は *Evangelismo italiano del Cinquecento. Questione religiosa e nicodemismo politico*, Roma 1979.

³⁷ *Carteggio di Vittoria Colonna Marchesa di Pescara*, 269 (CLVIII)。この短い書簡にはルドヴィーコ・ベッカデッリ (表記は Lodovico Becadello) の名も見える。年代は1542-43年8月24日。Adriano Prosperi, *Michelangelo e gli "spirituali"*, introduzione a Antonio Forcellino, *Michelangelo Buonarroti: Storia di una passione eretica*, Torino 2002, IX-XXXVII.

³⁸ Maria Forcellino, *Michelangelo, Vittoria Colonna e gli "spirituali"*. *Religiosità e vita artistica a Roma negli anni Quaranta*, Roma, 2009. 註2に既出。

マリヤ人の女》(Samaritana) といった図像学的主題が彼らの間で好まれ、しかも特にミケランジェロの筆になるものが、コロナを介して彼ら、特に「ヴィテルボ教会」の中心的教会人ボルに求められていたことを示している。フォルチェッリーニはまた、受難 (Passione) に関わり深い上記の主題や《哀悼》(Lamentazioni) の素描に、この頃から亡くなるまでの人生最後の時期にミケランジェロ自身も深く取り組んでいることを強調する³⁹。

近年修復が終えたばかりのサン・ピエトロ・イン・ヴィンコリ聖堂内にある《ユリウス2世の墓》(Tomba di Giulio II) (1541-1545. 開始は16世紀初頭に遡る) にも、時代の宗教観に影響された彫刻家としてのミケランジェロの表現法を指摘する。《モーセ像》の両脇に立つ、伝統的な「行動的生活」や「観想的生活」の表出像も従来の解釈や評価とは異なって、他のミケランジェロ作品、16世紀初めのローマ教皇ユリウス2世 (1443-1513. 在位1503-1512) 時代のシステーナ礼拝堂天井画や、同じ礼拝堂の、先述のようにクレメンス7世から始まってパウルス3世の時に完成した《最後の審判》と同様に何か深い意味を持って甦ってくる⁴⁰。

このような宗教的、図像学的文脈のなかで、ミケランジェロ解釈で注目された議論を提示したのは、アレクサンダー・ネイジェルである⁴¹。文化人類学上の贈答・贈与論が歴史学で使われてきたが、見返りを必要としない、求めない無償の恵与は、カトリック側の善行の論拠を無効にするであろう。神からの「恩寵のみ」(Sola Gratia) がすべてである。ここにはまた、あるいは社会史的なパトロンと制作者との関係と、あるいはマーケティング的な制作品の価格や販路などとは無縁な世界がある。作品を介して、創作者と享受者が宗教改革者のキリスト教教義を映し出す関係となっている。コンタリーニなどがプロテスタント側との調和を図るべく打ち出した「二重義認」(duplex iustitia) の問題とともに、この議論は果たしてミケランジェロがそのような気持で求める人に自作品を与えたようにしたのかどうか、神学的議論と結びつくとみて構わないかが検討されなくてはならないだろう。

また、コンチェッタ・ラニエーリは「意志」の問題を聖アウグスティヌスに端を発し、14世紀のグレゴリオ・ダ・リミニ (Gregorio da Rimini) から始まり、ルターの上長エジディオ・ダ・ヴィテルボ (Egidio da Viterbo c1465-1532)、そしてジローラモ・セリバンド (Girolamo Seripando 1493-1563) に至るアウグスティヌス (アゴスティーノ) 修道

³⁹ *Ibid.*, 128-130.

⁴⁰ *Ibid.*, 192-215.

⁴¹ Alexander Nagel, Gifts for Michelangelo and Vittoria Colonna, in *Art Bulletin*, 79 (1997), 647-668. さらにネイジェルの研究書は註13参照。Brundin, *op.cit.*, 67-69.

会の思想的系譜のなかで考察している⁴²。恩寵の問題も聖アウグスティヌスが深く考察しているところであり、聖パウロとともに改めて時代の受容に注目の必要があろう。パウロ神学が宗教改革の根底にあるように、聖アウグスティヌスもまた近代の新たな泉となった。

聖アウグスティヌス思想とミケランジェロを含む芸術家との関連を扱い、刺激的な研究書を書いたのはメレディス・J・ジルである。ローマのサンタゴスティーノ聖堂、そして堂内のサンタ・モニカ礼拝堂に関わる箇所は、ローマ定住を決める前にすでにミケランジェロがここで造形的に影響されていることを示している。フィレンツェのサント・スピリト聖堂でも彼はすでにアウグスティヌス会士と出会っていたが、同会士長として枢機卿ともなるエジディオ・ダ・ヴィテルボが居、またヨハネス・ゲリッツ (Johannes Göritz 1527年死去) の文化的拠点でもあったところがここであった⁴³。ミケランジェロのシステーナ礼拝堂天井画解説の有力説にアウグスティヌス神学からの解釈があり⁴⁴、彼と古代神学者との出会いのひとつをここに求めることができるだろう。

(三)

ここではこれまでの宗教上の議論とは別の視点から、しかし時代的には同時代の、フィレンツェを中心に意味深い研究状況を紹介したい。宗教上といっても、レーゲンスブルク会談 (1541年) に示されるように当時の政治と関連しており、15世紀末のフランス王シャルル8世のイタリア遠征から始まって、1559年まで続くハプスブルクの神聖ローマ帝国とヴァロワのフランス王国との争闘はイタリア半島に様々な桎梏と痛打と駆け引きをもたらしていた。この節で扱う16世紀前半のフィレンツェもそのようなヨーロッパ情勢の渦中にあった。

メディチ宮廷画家の研究で大著二冊を執筆した研究者にジャネット・コックス＝リリックがいる。ポッジョ・ア・カイアーノ別荘壁画、特に《ウェルトウムヌスとポモナ》 (*Vertumno e Pomona*) を扱う『メディチ芸術における公爵一統と宿命—ポントルモ、レ

⁴² *Nuovi documenti*, 81-88.

⁴³ Meredith J. Gill, *Augustine in the Italian Renaissance. Art and Philosophy from Petrarch to Michelangelo*, Cambridge 2005, 153-162. 根占献一「ピエリオ・ヴァレリアーノ著『学者たちの不幸』を読む—ヒューマニストたちの運命」、『学習院女子大学紀要』第12号 (2010)、67-82、特に78-79頁。エジディオ、ゲリッツ以前ではフィレンツェ出身のアウグスティヌス会士 Aurelio Lippo Brandolini が注目されよう。

⁴⁴ Esther Gordon Dotson, *An Augustinian Interpretation of Michelangelo's Sistine Ceiling, Part I and Part II*, in *The Sistine Chapel*, edited with Introduction by William E. Wallace, New York and London, 1995. 169-227. ページ番号は *Michelangelo. Selected Scholarship in English*, 5 vols 中の第2巻に所収されたものであり、初出の *The Art Bulletin* 61 (1979) に出たままの形で収録されている。いずれにせよ、ミケランジェロの英語文献だけでも膨大な数に達している。

オ10世、そして二人のコジモ』⁴⁵、コジモ一世とその妻エレオノラ・デイ・トレドの館となる『ヴェッキョ宮殿内ブロンズイーノのエレオノラ礼拝堂』⁴⁶がそれである。また彼女にはこれより先に出されたポントルモ素描集⁴⁷もあり、いずれも高い評価を受けている。

コックス＝リーリックの関心を呼ぶ画家は題名に表れている通りであり、最初の研究書では最初のコジモ、祖国の父、国父（Pater patriae）老コジモを描いたポントルモによる「国家肖像画」を問題にする。制作年代も特定でき、1519年の頃とされる。教皇はこの時レオ10世（1475-1521、在位1513-1521）でメディチ家出身最初のローマ教皇であった。1513年に教皇となり、この時点では実弟ジュリアーノはフランス貴族女性と結婚してヌムール公となり、甥のロレンツォは封土を得てウルビーノ公となっていた。こうして国父の孫ロレンツォ・イル・マニフィコの子孫による一統領域支配、宿願のフィレンツェ統治、そして終わりなきメディチ家繁栄は約束されたように思われた。

ところが、二人は1516年、1519年に若くして亡くなり、残された男系子孫はジュリアーノの子イッポリトとロレンツォの子アレッサンドロのみとなった。二人とも庶出であった。それに果たして、アレッサンドロがロレンツォ・イル・マニフィコを曾祖父と仰げるのかどうかは怪しい。イル・マニフィコの暗殺された実弟ジュリアーノの子孫、つまりジュリオ（後の教皇クレメンス7世）の庶子とも考えられるからである。この二人のうちイッポリトは後に枢機卿となり、アレッサンドロは神聖ローマ帝国カール5世の庶出女子マルゲリータを娶り⁴⁸、フィレンツェ公となるも、正妻の間には実子（庶子は三人）がなく、やがて暗殺されることになる（1537年）。

話を制作年代に戻すと、1519年にメディチ一族に嫡出子が生まれる。国父コジモの実弟ロレンツォの流れを汲むコジモ（後のコジモ一世、フィレンツェ公、そして最初のトスカーナ大公）がそれである。幸いなことにこのコジモには大ロレンツォの血が流れていた。母がマリア・サルヴィアーティ、つまりイル・マニフィコの娘クレツィアがサルヴィアーティ家に嫁ぎ、生まれた子がこのマリアであったからである。これを祝して描かれた絵画が「国家肖像画」、ウフィッツィ美術館蔵の《老コジモ・デ・メディチ

⁴⁵ Janet Cox-Rearick, *Dynasty and Destiny in Medici Art. Pontormo, Leo X, and the Two Cosimos*, Princeton NJ 1984.

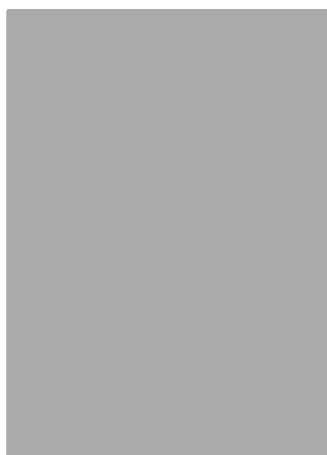
⁴⁶ Eadem, *Bronzino's Chapel of Eleonora in the Palazzo Vecchio*, Berkley, Los Angeles, and Oxford 1993. 《モーセの生涯》（*Vita di Mosè*）解説がその中心をなす。こちらは本論の冒頭から述べた宗教上の議論と繋がる点があるが、ここでは問題にしない。

⁴⁷ Eadem, *The Drawings of Pontormo*, 2 vols, Cambridge, Mass. 1981(1964).

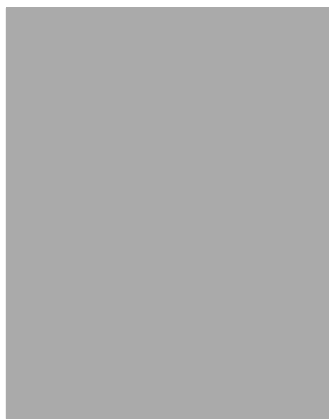
⁴⁸ マルゲリータに関しては、Renato Lefevre, 《*Madama*》*Margarita d'Austria*, Roma 1986. 未亡人となった彼女と直ちにOttavio Farneseが再婚した。つまりカール5世女子はメディチ家を離れ、フェルネーゼ家出身のローマ教皇パウルス3世の孫に嫁いだ。迎える側の思惑はFirpo, *op.cit.*, 314.

(国父コジモ像) ≧ (Cosimo il Vecchio de' Medici [Ritratto di Cosimo Pater Patriae]) (図版 - I) である。ここには、途絶える老コジモ—イル・マニフィコ系譜を老コジモの弟脈が受け継ぎ、家門に新たな希望が生じたことを示しているとされる。ウェルギリウス『アエネーイス』(Aeneis) からの引用 (VI, 143-144) が見られる。「(枝の) 一本が折られても、別の枝が欠けずにある。」(VNO AVVLSO. NO[N] DEFIC[IT] ALTER)。

ところで、1989年クリスティでポントルモの肖像画として≪矛槍人肖像画≫ (Ritratto dell'alabardiere) が競売にかけられ、米国ゲッティ美術館に所蔵されるに至った。この時、売買目録としてポントルモの肖像画が編まれたが、これを執筆したのはこの方面の権威となっていたジャネット・コックス=リーリックで、そこでは収蔵品となった油彩画 (図版 - II) はコジモ一世とされた。このモデルが誰であるかに関しては議論があり⁴⁹、コックス=リーリックに反論を加えた、最近の研究者はエリザベス・クロッパーである⁵⁰。彼女は著書『≪矛槍人の肖像画≫』で、それはコジモ一世を1537年に描いた肖像画でなく、1529-30年にフランチェスコ・グアルデイ (Francesco Guardi 1514 - 1554) を描いた肖像画であると主張する。彼女によると、コックス=リーリック



図版 - I



図版 - II

⁴⁹ Salvatore S. Negro, *Pontormo*, Milano 1994, X,8, 186.

⁵⁰ Elizabeth Cropper, *Portrait of a Halberdier*, Getty Museum Studies Art, Los Angeles 1997. コックス=リーリックは次の論文でクロッパーから受けた反論を指摘している。Cox-Rearik, Art at the Court of Duke Cosimo I de' Medici (1537-1574), in *The Medici, Michelangelo, and the Art of Late Renaissance Florence*, New Haven and London 2002, 35-45. 本文(p.35)とキャプション(Fig. 21)に相違が見られる。この書はフィレンツェ (*L'ombra del genio: Michelangelo e l'arte a Firenze, 1537-1631*, Palazzo Strozzi) と米国で2002年から2003年にかけて開催された展示のカタログでもある。

はこの肖像画成立年代を1527 - 28年から1537 - 38年頃に移したうえで、この絵には共和政時代（コジモの父ジョヴァンニ・ダッレ・バンデ・ネーレは1526年、ドイツ軍の前に倒れる）を偲ぶコジモの姿勢が表れているという。クロッパーに言わせると、服装いでたちから公爵となる人物をこのような衣装で描かせることはありえない。

肝心な点はその歴史把握、共和政解釈であろう。クロッパーはこの絵の所有変遷やグアルディー族、そしてこの絵に描かれた背景に見える要塞などに詳細に言及する。これはすべて、各時代のフィレンツェの歴史と関連するが、特にクロッパーはこの絵がフィレンツェの最後の共和国時代、つまり1527 - 30年にかけて、フランチェスコ・グアルディがどのような形でこの時、生きていたかを詳らかにする。共和国市民は都市を包囲する神聖ローマ帝国軍隊からこの国を防備するために戦っていた。家名はまた防備（guardia）を想起させる。この絵画はその証であるというのが、彼女の主張である。参戦年齢が15歳まで引き下げられたことも、史料上明らかになっている。そして、別のフランチェスコ・グアルディがこの同名者の前に生きており、これだと高齢すぎて年が合わず問題であったのだが、新史料が出てこの点も解決した⁵¹。

解釈に相違があるとはいえ、ともにアメリカの研究者が市民性を問題にしているのは、少なからず興味深い⁵²。このようなアメリカの研究者に対して、イタリアの権威ルチアーノ・ベルティの筆は沈着であり、クロッパーの主張の基調となっている。ベルティによれば、「ポントルモは当初から親メディチ派であった。彼がイッポーリトとアレッサンドロとともに枢機卿パッセリーニの国外追放に喜ぶ理由は全くなかった」。クレメンズ7世からメディチの御曹司たちの支援を託されていたシルヴィオ・パッセリーニ（Silvio Passerini）がフィレンツェから追われたことを指す。これは最後の共和国成立に至った、ローマ号掠に端を発する1527年のことである。そのようなポントルモが「しかし少なくともヤコボの一作品、しかも傑作が、ある防衛者を不滅にしている。そしてそれが矛槍人である」⁵³と書いている。

(四)

以上述べてきたことから、16世紀のフィレンツェとローマを歴史叙述の対象として纏めることは有意義な試みに思われる。メディチ家を含む有力フィレンツェ商人はローマ

⁵¹ Luciano Berti, *Pontormo e il suo tempo*, Banca Toscana 1993, 154.

⁵² コックス＝リーリックと変わらぬフランス研究者の見解は、Costamagna, *op.cit.*, 90. そしてここでも共和政府の遺産が示されているとす点では、米国研究者たちと同一である。コスタマニャでは問題の絵画題名は「矛槍人の服に扮したコジモ一世の肖像」(*Ritratto di Cosimo I in divisa d'alabardiere*)。フィルボ（註15）は彼の見解を支持する。Firpo, *op.cit.*, 308-309.

⁵³ Luciano Berti, *op.cit.*, 152-159, 特に152.

で活発な経済活動を展開したが⁵⁴、16世紀にはいると同家から教皇が出たこともあり、そして宗教改革の勃発、カトリック改革の進展、ヨーロッパの非ヨーロッパ地域への拡大など、新たな時代の展開のなかで、フィレンツェ出身者もカルネセッキの場合が示すように別の顔を見せ始める。有力市民間の協調と対立はフィレンツェ史の変わらぬ姿であり、同世紀では舞台がローマに移った観がある。

このため、メディチ家と敵対する実力ある銀行業者である一方、特にラファエッロやチェッリーニへの芸術後援で知られるビンド・アルトヴィティ (Bindo Altoviti 1491-1556) に関する専門論文の出現、展覧会の開催など注目すべき動きも起こっている⁵⁵。メディチ教皇時代が終わった後のパウルス3世下でのフィレンツェ出身のベンヴェヌート・オリヴィエーリ (Benvenuto Olivieri 1496-1549) に関する研究書⁵⁶も現われた。アルトヴィティもオリヴィエーリもポントルモの同時代人である。そしてミケランジェロやヴァザーリとの関係も浅くはなかった。勿論これらの芸術上の師弟と関わった、彼ら以外の中小企業家も存在する。ヴァザーリが書いたミケランジェロ伝などには、ローマのジュリア通りにあるフィレンツェ人の「国民教会」、San Giovanni dei Fiorentiniの建築資金支援の話題が出、当地住まいのフィレンツェ人たちの協力ぶりを垣間見させてくれよう。ここには明らかに一種のネットワークが生じている。

このような研究や文化的催事に関心を寄せながら、この小文で取り扱った宗教史的視点を今後も深めてゆかなければならないだろう。我が国の16世紀の歴史の見方がかなり二項対立的図式に囚われていたことや、イタリアの改革者たちの研究に力が注がれることがなかったために、初期トレント公会議までの錯綜した宗教上の推移が知られることは少なかった。状況はしかしあまり変わっていないようにも思われる。それにこの分野の研究は決して容易ではない。私たちのヨーロッパ研究には常に困難が付きまとうにしても、ここは生の信条と関連する点があり、いかなる視点で接近しようとしているかが問われることになる。

これまで特にイタリア・ルネサンスに関わる一研究者として出版社Edizioni di Storia e Letteratura (Roma) には随分とお世話になり、それは今後も変わらないであろう。この社から書を出した優れた研究者たちが、その序言でよく挙げる Mons. Giuseppe De Luca (1898 - 1962) の名は社主として記憶に残った。ただ、この敬称 (Mons.) を深く

⁵⁴ Cfr. Melissa Merian Bullard, *Mercatores Florentini Romanum Curiam Sequentes* in the Early Sixteenth Century, in *Journal of Medieval and Renaissance Studies*, 6(1976), 51-71.

⁵⁵ *Raphael, Cellini and a Renaissance Banker. The Patronage of Bindo Altoviti*, (Isabella Stewart Gardner Museum, Boston, and Museo Nazionale del Bargello, Firenze(2003-2004), Mondadori Electa 2003.

⁵⁶ Francesco Guidi Bruscoli, *Benvenuto Olivieri, I mercatores fiorentini e la Camera apostolica nella Roma di Paolo III Farnese (1534-1549)*, Firenze 2000.

気に留めることはなかった。この拙文を草するに当たり、いくらか調べることになり、『ヴィットリア・コロナとレジナルド・ポルに関する新史料』のパガーノに改めて目を通すと、ジュゼッペ・デ・ルーカが宗教史研究を行う司祭であることを、今度は明確に認識した。レジナルド・ポルの専門家トマス・メイヤーはこのデ・ルーカについて、コンタリーニの研究等で知られるエリザベス・グリーソン (Elisabeth Gleason) の言として、異端審問関連文書が調査できるようになって急速にポルへの関心が冷め、彼とコロナは人が考えるほど、聖なる人間ではないと語ったという⁵⁷。

私たちは時代のみならず地域の上でも彼らから離れている。現代の研究者は一先ず置いて、歴史の人間がキリスト教教義とこれのtemporalなあり方がどうあるべきかを思考したり、表現したりしたかを問うてみたいものである。いかなる信仰告白を行った者か、「宗派」であるかの前に、いかなる理解、解釈を行ったかに重きを置いて考察する方向を探りたいと考える。宗教史の諸問題は歴史的研究により、解決はされなくても理解することを可能にするであろう⁵⁸。

(本学教授)

※本論は、科研基盤 (B) 「ヨーロッパ史における政治と宗教のダイナミズムと国家的秩序の形成」(平成22~24年度。研究代表者甚野尚志) による研究成果の一部である。

⁵⁷ Mayer, *Reginald Pole*, 386 n129. ポルに関しては、Dermont Fenlone, *Heresy and Obedience in Tridentine Italy. Cardinal Pole and the Counter Reformation*, Cambridge 1972 とともに、W.Schenk, *Reginald Pole. Cardinal of England*, London, New York and Toronto 1950 を優れた研究書と見なすが、英語で執筆したドイツ人研究者ヴィルヘルム・シェンクに関するメイヤーの情報も興味深い。Mayer, *op.cit.*, 383-385.

⁵⁸ ロレンツォ・ロット(c1480-1556)もまたこの時代の宗教史の展開と関わる画風の特徴主であったが、ロットに関わる次の論文は本論との関連で示唆を与える。Adriano Prosperi, *The Religious Crisis in Early Sixteenth-Century Italy*, in Lorenzo Lotto. *Rediscovered Master of the Renaissance*, Washington, New Haven and London 1997, 21-26, 特に23.同じアドリアーノ・プロスペリのEdizioni di Storia e Letteraturaから出た、次の書は再刊された。*Tra Evangelismo e Controriforma. G. M. Giberti (1495-1543)*, Roma 2009(1969). そのPrefazioneにはこの時代の宗教問題に接近する際の方法が叙述されているのではなからうか。